



福島のこれからを皆で作りたい

～環境再生への取り組みを正しく知って私たちが伝えたいこと～



📍 8/3 ツアー検討会議



環境省や福島県が行ってきた除染や除去土壌の再生利用に向けての取り組みを学びました。



チームに分かれて『福島、その先の環境へ。』ツアーの行き先を検討しました。



📍 10月25日～10月27日
「福島、その先の環境へ。」ツアー 2024



ツアーでは、テーマにかかわらず、
中間貯蔵施設と伝承館を見学しました。





17A

17

PREMIUM 400

17



18A

18

PREMIUM 400

18



19A

19

PREMIUM 400

19



17A

17

PREMIUM 400

17



18A

18

PREMIUM 400

18

各テーマごとのコースをめぐるなかでは特に、
地域の産業に携わる皆さんの地元愛と誇りを強く感じました。



ふるさと



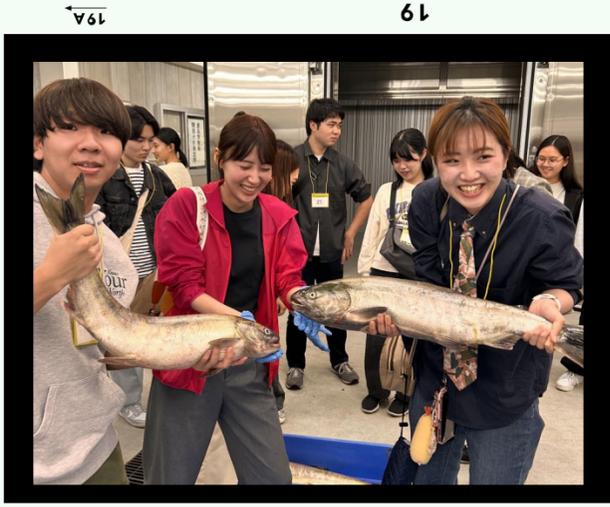
17A

17



18A

18



19A

19



17

PREMIUM 400

17



18A

18

PREMIUM 400

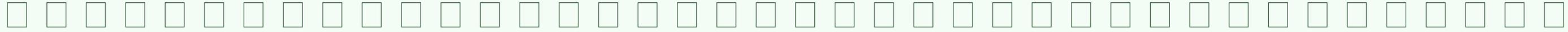


19

PREMIUM 400

19

このワークショップを元に、自分たちが福島で感じたこと、学んだことをチラシにまとめました。



知ってる？ 福島のこと



私たちが伝えたい福島県の姿。



環境再生への取り組み

01 除染

放射性物質が付着した土や落ち葉などを取り除いたり、表面を洗浄したりしました。福島県内では、40万軒以上の住宅、500ha超の農地などが対象になりました。

02 保管・輸送

除染により生じた除去土壌等は、各地域の仮置場等で一時的に保管され、順次、中間貯蔵施設へ運ばれます。(輸送対象物は東京ドームの容積の約11倍)

03 中間貯蔵

県外で最終処分されるまでの間、除去土壌等を安全に集中的に管理・保管するのが**中間貯蔵施設**です。

04 再生利用最終処分

福島県内で発生した除去土壌等について、中間貯蔵開始後**30年以内**に福島県外で最終処分を完了することは法律にも定められた国の責務です。この実現に向けては、最終処分量を低減するために**再生利用**することが鍵となります。

出典：環境省「福島、その先の環境へ。」Webサイト 環境再生への取り組み <https://bunshuonkei.env.go.jp/next/ef/ef/>

ふくしまの新産業・新技術

福島水素エネルギー研究フィールド(FH2R)

Why 水素?

水素は電力を大量に長期で貯蔵することができ長距離輸送が可能

FH2Rでは、18万㎡の敷地内に設置した20MWの**太陽光発電**の電力を用いて、世界最大級となる10MWの**水素製造装置**で水の電気分解を行い、**毎時1,200Nm³(定格運転時)の水素**を製造し、貯蔵・供給

https://www.nedo.go.jp/news/press/2405_011223.html

水素をつくる、ためる、はこぶ

つくる

H₂

水素製造量
時間あたり 約1,200 Nm³

一般家庭の消費電力量 or 燃料電池車(FCV)の燃料
約150世帯(1ヵ月分)の電力供給、または500台のFCVに水素を充填できる

ためる

貯蔵を通じて運ばれた水素は内径150mの6本の水素ガスホースに保管。水素は可燃性でも爆発し、不純物を除去。高圧化や水素ガスも大気圧の1,000倍の圧力となる約20MPaまで高圧

はこぶ

水素ガストレーラー(12台) 高圧した水素を220台、3,000台まで充填することが可能。けん引するクルマと異なり静寂地に水素を選びます。水素ガスカードル(300m³×15台、150m³×4台) 小型容器をまとめて固定した集合容器。300m³を充填できるタイプは約20MPaに高圧した水素も220台充填することが可能。その他にも、150m³を充填できるタイプがあり、トラックなどに設置、静寂地に運びます。

<https://www.nedo.go.jp/press/2405011223.pdf> (14,15~1~2)

フタバスーパーゼロミル

岐阜の燃糸会社がなぜ双葉町に工場を?

社長の双葉町の再興に懸ける思い。

フタバスーパーゼロミルを稼働させ双葉町を代表する糸やタオル製品を日本だけでなく世界に発信



<https://wwwenv.go.jp/dokushinotehfab/>

大学生が

「福島、その先の環境へ。」ツアー2024で感じたこと

再生や復興は元に戻すのではなく1度更地になった場で可能性を見出している

高度経済成長期を原子力発電所が支えていたのは事実

長期間多くの方が復興に向けて取り組んでいるが課題は多く残っている

除去土壌の最終処分をどのように周知していくべきかととても難しい

1000人に1人でもいいから多くの方に知っていただくのが大切

震災での被害だけでなく避難所での生活もとても困難があった

